

TIE エッセイ

職種
画家

名前

岡本 太郎

テーマ

私のネクタイ

No.1



「そのネクタイは御自分のデザインですね」とよく言われる。

一目でわかるらしい。パリでも、日本からは地球の裏側になるブラジルあたりでも、「さすが。いいネクタイだなあ」と賞めてくれる。

作っている量が少いので、なかなか手に入りにくいらしく、酒席などで親しい人だと、「取りかえっこしよう」とねだられる。相手は大がい名あるブランドものだが、私はもう何十年も自分のデザイン以外締めたことがないので、始末に困る。

はじめてネクタイのデザインを頼まれたのは、もう三十年近くも前になるだろうか。その頃のネクタイといえ、世界中、斜の縞か、餅のように小さい模様 がチョンチョン並んでいるだけ。せいぜい派手でもペーズリーといったところ。私もさまざまの独特な形を描いてみた。ネクタイ屋さんはこれは変っています、面白い、と大喜びで製品にしたが、小さい模様になってしまうと、離れたらその特徴がはっきり見えない。

これではつまらないと、やがて私はネクタイいっぱいにはば一っとひらいたようなフリーハンドの大柄をつけてみた。個性的なタッチ、猛烈に流動的で原色のはとぼしるような。ネクタイ屋さんはこんなのは見たことがないと驚いた。しかし、おっかなびっくり作って売り出したら、意外に好評なのに気をよくして、毎年作り続けた。

そして五、六年たった頃、イタリアあたりでも派手な大柄のネクタイが流行りだし、世界中にひろまって行った。二、三年たつと、日本の穏健なビジネスマン、御年配のトップの人たちまでがそういうのを締めてあらわれるようになった。日本ではとかく外国の二番煎じを基準にして、模倣はこっちのお家芸と信じているらしいが、どこにもなかった大柄のタイを世界中にはやらせた元祖は私なのだ。

男のきまりきった姿のなかに、思いきった夢をひらくことの出来る胸もと。誇らかに、豊かな彩りを楽しんでほしいと思う。

S.58.8.

TIE エッセイ

職種	名前	テーマ
ダイエーホークス監督	王 貞治	ネクタイと私

No.2



シーズン中、地方などに遠征するときには、必ず背広を着て、ネクタイをしますが、スポーツの仕事をしている割には、案外ネクタイを着用します。仕事柄、どうしても、カメラやテレビなどの被写体となるときがありますので、ユニフォームのとき以外にも、外出のときとかは、出来るだけネクタイをする様に心掛けてはいます。色は、昔は派手なものが多かったんですが、最近は、ブルーとか、紺(ダーク)系統が好きで、オーソドックスな落ち着いた色が多いです。

ネクタイは又、アクセントとしての役目のほか、気分を大変引きしめる役割も果してくれますので、意外と大切なものと思っています。

初めてネクタイをしめたのは確か、高校(早実)を卒業して間もなくのときで、都内のあるデパートで買いました。そのとき急に大人になった様な気持で、何か、気持も引き締ってきたのをおぼえていますね。ネクタイとは、そのとき以来の付き合いで、現在五十本ぐらいありますが、使用済みのネクタイもたくさんあってその処置に困っていますが、我々は外国に行く機会が多く、そんなとき、ついたくさん買い込んで来て、後で気に入らないものもあって後悔することがあり、ずい分無駄な買物をしたこともありますね。

最近では、フォーマルウエアか、スポーティ性が、いずれかを基準にして選ぶようにしていますが、流行もありますし、あまり考えますと、かえって難しくなってしまう。

S.58.1

TIE エッセイ

職種	名前	テーマ
NHK記者	伊達 宗克	天皇陛下とネクタイ

No.3



感謝状

父上さま

忙しい おとうさんへ

きょうこそ ラブアタック

いつもいつも ありがとうございます

ほんとうに 感謝しています

どうぞ いつまでも いつまでも

健康でいてください

昭和58年6月19日

こんな“感謝状”を準備して、デパートのネクタイ売場は“父の日”に向けて、売り上げをのぼそうとしていた。

かくいう私も、このカードのついたプレゼントを、感激しておいただいた一人である。そのあと、「甘いなァ〜」と、深く反省したのだが……。

そして、これまでに、贈り物にネクタイを選んだことが、何度くらいあったらうかと考えてみた。大勢の人が、ネクタイを贈った経験をお持ちだろうが、天皇陛下にネクタイを差し上げた方はそれほどいないだろう。永く皇室を担当していた関係で、天皇誕生日にマスコミ各社の有志でネクタイをお贈りしたことが何回かある。陛下はその都度、次にお目にかかるときには、必ず私たちが差し上げたネクタイを結んで下さっていた。

そんなことから思いついて、陛下がネクタイのプレゼントを貰われた最近の記録を調べてみた。エリザベス女王ご夫妻が来日された昭和五十年、陛下は七十四歳の誕生日を迎えられた。この日、皇后さまはネクタイを贈られている。昭和五十四年は七十八歳。皇后さまはブルーの模様のネクタイを二本、プレゼントされている。同五十六年の傘寿には、皇后さまはカフスポタンを選ばれた。そして去年は、淡いグレーのウール地のベストだった。

なぜベストを選ばれたか。これには陛下の“ファッション革命”が秘められていた。陛下の服装は、宮中祭祀を行われるときの神事服。儀式のときの燕尾服、タキシード、モーニング。植物観察や海洋生物採集のときの活動着を除くと、朝から晩まで三つ揃いの背広にネクタイ姿で通されてきた。この方針は徹底していて、陛下は入浴されたあとも、再び三つ揃いの背広をお召しになり、きちんとネクタイを結ばれる。御用邸へ行かれたときも同じだったが、二年前から「せめてご静養先ではもっとおくつろぎいたごう」と、スポーツシャツに替上衣、ノーネクタイの生活がはじまった。ところが、長い間、三つ揃いの背広にネクタイで通してこられた陛下は、何となく心もとない様子なので、皇后さまはスポーティーなジャケットにもあうベストのプレゼントを思いつかれたのである。皇后さまが選ばれたベストは、今年のプレゼントの細めのネクタイを結ばれたときにもよくお似合いだ。

陛下の背広はブルーかグレーが基調色。ワイシャツも公式には白だが、そのほかはブルーやグレーの柄ものが好み。従ってネクタイもこれにあう色である。お買上げは複数のデパートからとり寄せて選ばれるが、国産をご愛用なので、ひと目見て「あっ。あれは……」と気づかれた方もありだろう。

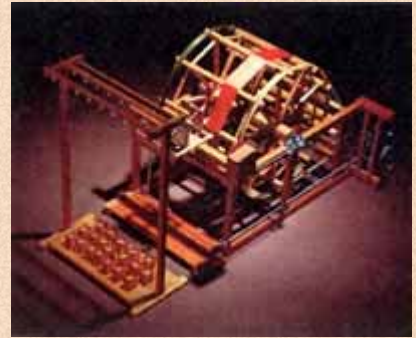
ここまで書いてきて思い出したのだが、ネクタイは差し上げただけではなく、いただいてもいた。新東京国際空港建設のため宮内庁下総御料牧場が三里塚から栃木県へ引越す際、御料牧場の緬羊の毛で織った茶系のホームスパンのネクタイを記念に頂戴していた。もったいなくて、これまで一度も使ったことがなかったので、すっかり忘れていたのだが、この『ネクタイだより』が出たときから結びはじめることにきめた。そのうち、ネクタイ博物館に寄贈しよう。

S.58.7.

Copyright:(C) 2002 IMAI CO.,LTD. All Rights Reserved.

職種	名前	テーマ
西川きよし	タレント	やすしにきよし、ネクタイに人

No.4



早いものでして、やすし君とコンビを組んで十七年になります。ひと口に十七年といいますが、いろいろなことがありました。

コンビを組んで十年間ぐらいは、お揃いの衣装を着ていたんです。お揃いのものを着ていると二人をひとつに見てくれるんです。けれどネクタイだけは、仲々揃いませんでした。やはり、ネクタイぐらいは、自分の好み合ったものを作りたいという気持ちが、男にはあるんでしょうね、自然と。

僕は、ネクタイをだらしく締めている人を見るとだめなんです。僕は、他の人に比べて非常にシックな服を好んで着ます。ですからネクタイも同様にシックなものを好みます。けれど、漫才をする時、その内容が非常にぬけたもので、思いっきり派手なネクタイをするんです。そうすることで自分達を滑稽なものに見せて、お客様に楽しく過してもらおうというわけです。

人からよく「地味だね」と言われるんですが、性格に合わないものを無理して身につけたくないんです。それに僕は顔のつくりが派手ですから出目でもありますし地味に装わないと黙っていても漫才になってしまうんですよ。喜んでいいのか、悲しんでいいのか。ですから漫才の仕事以外はシックにまとめています。

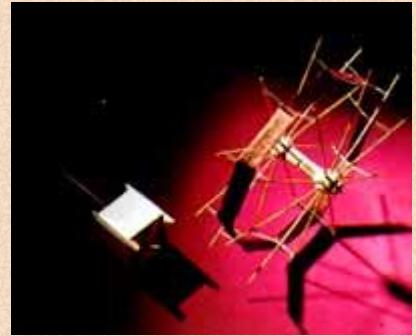
僕は、ネクタイやスーツ、身につけるものには、その人の人柄が表われると思うんです。やすし君は、気性が激しいから派手なネクタイを好んでするようです。やすし君は、陽、僕は、陰、まるっきり正反対なんです。だからこそ、十七年間続いていると思います。

横山やすしという人間がいるから僕も漫才という仕事で生きていけると言っても過言ではないような気がします。僕ひとりでは絵になりません。二人そろっても絵になるかどうか分かりませんが、ですから僕達は、やすしきよし、”やじさんきたさん” というような関係なんです。ネクタイもそれだけでは、どうしようもないと思うんです。やはり、スーツやシャツ等にマッチしてはじめて引き立つものだと思います。そして、何よりも大切なのが、ネクタイを締めている人の人柄だと思います。やすしにきよし、ネクタイに人、といったところでしょうね。

s.58.7.

職種	名前	テーマ
陶芸家	唐杉 涛光	ネクタイの思い出

No.5



私が小学校の頃は、緋の着物に袴姿で登校したものでした。五年生の頃、洋服(詰襟)が着たくて母にねだり洋服を買って貰ったのを覚えている。

しかし、中学校へ入学すればみんな一年中、洋服の生活でした。中学校で詰襟を着る様になると、今度はネクタイ姿に憧れ、早く大きくなって歩く様になりたく、大人の人々のしめているネクタイがやたらと目につく様になり、大変うらやましく思ったものでした。

やがて背広を着る様になりネクタイを選ぶ時になってみると、地味なものばかりで派手なものは余りありませんでした。たまたまイタリー製の素晴らしいネクタイを見つけたけれど、それは大変に高価なもので自分にはとても買えるものではありませんでした。毎日毎日飾ってあるショーウィンドウの前に行ってははただ眺めているだけでした。

その時代、ハイカラーに蝶ネクタイをつけるのが流行したので、自分で幅の広いリボンを買って来ては女の子が結ぶ様に結んで見たり、大きな蝶ネクタイを作ったり、無地のネクタイに油絵具で派手に絵を書いてしめたりし、変ったネクタイを使用するのに苦労をした事を思い出します。

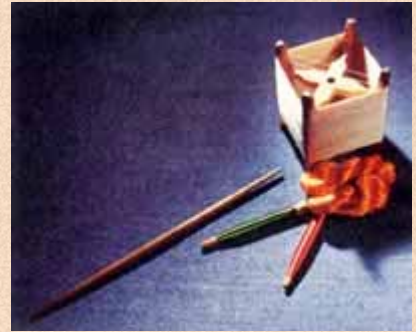
戦後十数年を過ぎた頃からは、種々と良いデザインのもの、又よい素材を用いたものも出廻り、最近では有名染色家などが手がけたネクタイもある様です。

加えてネクタイだけを取扱っている専門店も大分ふえて来た様で、誠に喜ばしい事です。ネクタイの発展によってその国の文化の向上の程度が分るのではないかと私は思うのです。

s.58.1.

職種	名前	テーマ
映画監督	熊井 啓	シーカー監督のネクタイ

No.6



十八年ほど前、ローマの撮影所に、撮影中のヴィットリオ・デ・シーカ監督を訪ねた時のことである。

会うのは無理かと思ったが、申し込んでみると、「かまわぬからステージに来なさい」との返事がきた。

このシーカ監督は、私の最も尊敬する監督の一人である。「自転車泥棒」「靴みがき」「ミラノの奇跡」などを学生時代に 見て感動し、映画界を志したものだ。

心をはすませステージの中へ入ると恰幅のいい白髪の紳士が、若い俳優たちに演技指導をしていた。グレーの背広に白いワイシャツ、そして紺系統のネクタイをきちんとしめ、それには細かい縞模様が入っていた。

ローマの貴族か大学総長といった印象であった。シーカ監督は底辺に生きる人々を描くのを最も得意とするだけに、私はラフなスタイルを思い描いていたが、全く逆なものには少なからず驚いた。一見、人を寄せつけぬ威厳のようなものすらあった。

しかし、カメラを離れると温顔をほころばせ、暖かい言葉で私をねぎらってくれた。撮影現場はホコリだらけで、ネクタイは一日で汚れてしまう。

長い撮影期間で、何本あってもたまったものではないが、シーカ監督は、すべての作品をこのような身だしなみで撮っていたのだ。私はシーカ作品の格調の高さの秘密が、ネクタイを見た瞬間に判った気がしたのである。

s.58.8.

職種

名前

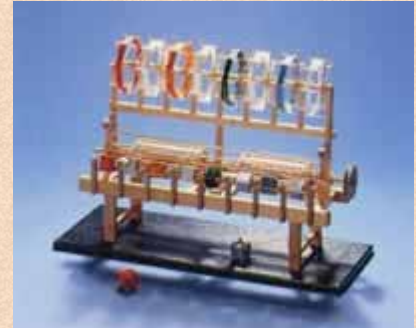
テーマ

作曲家

都倉 俊一

ジーンズ文化とネクタイ

No.7



はじめて紺のブレザーにうすいブルーのネクタイを締めた時の身のひきしまるような興奮を私はいまでもハッキリと覚えている。ちゃんとネクタイを締めた時のなんと誇らしいような、大人の仲間入りをしたような気持を覚えている方も多いと思う。

まだ社会人として出発していない学生、そしてその制服である学生服。学校を卒業し、社会へ一歩ふみ出した社会人として彼らの象徴ともいえる背広とネクタイ。つまりネクタイを締めるという事が大人の仲間入りをする一つの儀式であった時代が、ついこの間まであった。

しかし複雑な情報社会、多種多様なファッション感覚の中で、このような単純な社会的図式は、いつのまにか消えてしまったようである。かつての国民的シンボルとも言べきネクタイは、どこへ行ってしまったのか。今、街を歩く若者に、ネクタイ姿をみつける事はほとんど出来ないし、かくいう私も最近、ほとんどネクタイをしなくなってしまった。

この現象は十年くらい前からだったと思う。つまり、アメリカ的な合理性やライフスタイル。つまり自由な生き方、物の考え方のシンボルであるジーンズファッションというものが、日本の若者の間に定着して以来、いつの間にか、胸元は自由にはだけていた方が“ナウイ”ようになってしまった。このジーンズ文化の定着により、ネクタイは若者から離れ、サラリーマンの象徴としてだけの役目しか与えられなくなってしまった。……そう、それは世の中の男が皆、あのステキなソフト帽をかぶらなくなってしまったように、若者はネクタイというものをわすれかけている。

この“ラフ”な、“ワイルド”なファッションは当然、世界的な傾向であり、ヨーロッパの若者もほとんどがジーンズファッションを楽しんでいる。しかしそこにアメリカとは多少の差異を私は感じる。ジーンズ文化とはそもそも伝統的なヨーロッパ文化に対して、歴史のないアメリカ人が考えたある種のアンチ・テーゼである。

アメリカ人にとってジーンズは一つの文化であり、ヨーロッパ人には単なるファッションにしかすぎない。つまり、ヨーロッパ人の本番は、シックにネクタイを締めた文化であり、彼らはこの二つをとともうまく使いわけているように思う。

我々日本人も単にジーンズ文化だけで満足出来るとは思えない。現に我々もこの二つを生活の中でミックスしている。時代の流れによるものか、単に個々の年齢的な感覚の移り変りによるものなのかそれはわからない。しかし現に私は今、ネクタイになつかしさを覚えはじめています。

s.58.7.

職種	名前	テーマ
元中日ドラゴンズ 投手	坂東 英二	ネクタイと私

No.8



新幹線ホームで紺のブレザーを着た一団を見た人も多いと思いますが、胸にペットマークをつけ、背の高い、浅黒い顔、パーマをかけた短かめの髪、ロードに出掛けるどこかのプロ野球選手達である。背広は同じでも、ワイシャツとネクタイの柄が 違うだけで、どの顔もよく似ている。勝負に生きる男達、仲のいい光景である。

選手達が遠征にネクタイをそろってする様になったのは、そう遠い昔のことではない。昭和四十四年、プロ野球を根底から揺がす、あの八百長事件、黒い霧事件からである。西鉄ライオンズは球団を手放すはめになり、それに続いてオートレース八百長とまさに空前の事件で、コミッショナーは、衿を正すためにファンの前では背広にネクタイをと通達を出した。

私が入団した昭和三十四年頃は夏などはアロハシャツに、ひどい選手はゴムゾウリ姿で平気で一等車や二等車に乗ったものです。それが一時期、銀座の百姓と悪評まで生んだ。

私が初めてネクタイをしたのは、入団したキャンプでの当暗のテレビ番組、「平凡ニュース」に王貞治君と出た時と記憶している。高校野球で騒がれ、新人王の呼び声もあったが、学生服しか持っていなかったのが、急いでマネージャーと神戸・元町の洋服屋で、急遽、買ってテレビ出演となったのです。案の定、王君も似合わない背広姿で、二人して首がまわらぬ不自然な対談で、番組が終ったとたんに学生服に着替えたものです。

それ以来、余程の行事以外でもそんなにネクタイをしめたりしなかったが、いつの間にかタレント業に首を突っ込み、大あわてで、ネクタイを揃えています。

おもしろいもので、ネクタイ一本にも、各々の顔があり、衣装を決める時にネクタイが決まらないくらい不愉快なことはいないんです。ワイシャツとのバランスも難しい問題であるが、背広とのコンビネーションは、遠い昔の投球内容にも似て、スパッと決った特番組までがうまくいきそうな気がする。一日のスタート、好不調はネクタイ選びで決ってしまう。

s.58.7.